

植民地朝鮮における西洋音楽の受容

- 高等音楽教育をめぐる朝鮮人人材育成を中心に -

金 志善 (東京藝術大学)

本発表は、植民地朝鮮における高等音楽教育の人材育成がどのように行われていたのかその実態を当時唯一の専門音楽教育機関であった梨花女子専門学校音楽科の卒業生と、日本の音楽学校に留学した朝鮮人の活動を中心に明らかにすることで、これらが西洋音楽の受容の一側面においてどのような役割を果たしたのか考察するものである。

梨花女子専門学校音楽科は、西洋音楽を専門的に学ぶことのできる環境を朝鮮に作ったという点で同科の存在は大きな意義がある。同科の卒業生には私立女学校の中等教員の資格が与えられ、植民地朝鮮で中等音楽教員を自給できる唯一の機関でもあった。しかし、同科は女子学生しか入学できなかったため、男子学生などは西洋音楽を学ぶために留学を選ばざるを得なかった。

当時の朝鮮人学生の留学先は、主に日本の音楽学校であった。日本には、官立の東京音楽学校のほか、私立の日本音楽学校、東洋音楽学校、東京高等音楽学院、帝国音楽学校など多くの音楽専門教育機関が存在しており、さらにこれら以外にも小規模の音楽学校が数多く存在していた。日本の植民地という特殊性の下で音楽を目指した朝鮮人は、距離的にも近く、政米より言語的な壁の低い日本の音楽学校に多く留学した。

日本の音楽学校に留学した朝鮮人音楽家は、帰国後、エリート音楽家として活動を行い、解放前後の西洋音楽の発展にも大きく寄与した。例えば、日本に留学した朝鮮人により西洋音楽の音楽用語を含む音楽理論が導入され、現在の韓国までその影響がおよんでいる事実はその一例である。しかし、現在の韓国人はそれを「日本式の西洋音楽」ではなく、「西洋音楽」そのものとして認識し、定着したのである。

以上の状況を踏まえ、本発表では梨花女子専門学校音楽科の卒業生と日本の音楽学校への留学経験を持つ朝鮮人音楽家の活動実態を明らかにすることで、彼らが朝鮮の西洋音楽の受容においてどのような役割を果たしたのか深く考える。